

天祖神の大道祝詞

おおみかみ たたえこと

天祖神 賛言

一礼二拍手一礼

オホミカミ トホカミ エミタメ ヒフミヨイ

オホミカミ ヒフミヨ イムナヤ コトモチロ

きよめのおおはらい
清 大祓

かけま あや かしこ
掛巻くも綾に畏き

あめつちもとのおおみおやのおおみかみ
天地根本太御祖大神

もとつかみ あまつかみ くぬつかみ くにつかみ
元津神 天津神 地津神 国津神

もちろね かみかみ みまえ
百千万億兆の神々の御前に

春は雄大しく煙噴く阿蘇の御山に立つ神火に焼き
 夏は荒潮の逆巻く鳴門の九重の怒濤の渦潮に祓い
 秋は満月に照映る十和田の藍青色冴ゆる湖水に洗い
 冬は旭日に光さす富士の峰に積む白雪に清む
 省み恥ち悔い畏れ覺りて諸々の

枉 汚 禍 過 迷 疑 妬 讒 偽 の 罪
 貪 怒 貧 病 乱 狂 盜 争 殺 の

氣枯を焼祓い洗清め

天祖神を中心にして身の分限明らめて結え生む

大道を世界人類の道德として實行う由

見看し聞食せと

恐み恐みも白す

一切成就 みななるの 大祓 おおはらい

掛卷 かけま くも綾 あや に畏 かしこ き

天祖神 おおみかみ は全 また く清 きよ く淨 きよ き天地 あめつち を宮居 みやい となし給 たま う
一切産靈 みなむすひ に成就 な ると 恐 かしこ み恐 かしこ みも白 もお す

三種 みくさの 大祓 おおはらい

人 ひと は映 うつし の様 さま に澄 す みたる靈覺 ちえ にて中心 みなか を結 ゆわ え
玉 たま の温 あたた かき仁愛 いづくしみ にて森羅万象 おおくのもの を包 つつ み
太刀 たち の嚴 いか しき勇氣 いさみ にて悪 あ しき根源 もとね を断 た ち

焼祓やきはらい洗清あらいきよめて仕奉つかえまつると

恐かしこみ恐かしこみも白もおす

四魂よつの 大祓おおはらい

掛卷かけまくも綾あやに畏かしこき

天祖神おおみかみは人ひとの靈魂みたまに四魂よつの活動はたらきを与あたえ給たまう

和魂わのみたまは親したしみにて万物みなもの万象ととのを調和ならえ完成はたらきすの活動

幸魂さきみたまは仁いつくしみにて一ひとつを多おおしとする創造つくり進歩すすみの活動はたらき

奇魂くしみたまは智ちえにて多おおしを一ひとつとする整理まとめ清淨きよめの活動はたらき

荒魂あらみたまは勇いさみにて矛盾くるいを中心みなかに結ゆわえ顕現うむの活動はたらきを発露あらわす

慎つつしむは心こころの变化うつりかわりにして人ひと左あちに寄より右こちに就つく時とき

親したしみは狎疎なれ うとしとなり 仁いつくしみは逆よこしま 憎にくしみとなり

智^{ちえ}は^{くるい}狂^{おろか}愚^{おろか}となり 勇^{いさみ}は^{あらそい}争^{あらそい} 怯^{きおくれ}となる
常^{つね}に^{かえり}省^はみ^は恥^はち^く悔^{おそ}い^さ畏^され^と覚^さり^と 焼^や被^{きは}い^ら洗^{あら}清^いめ^きて^よ仕^{つか}奉^えま^つつ
恐^{かしこ}み^{かしこ}恐^{かしこ}み^{かしこ}も^も白^おす

御^み霊^{たま}清^{きよ}め^めの^の おおはらい
大^お祓^{はらい}

掛^{かけ}卷^まくも^も綾^{あや}に^{かしこ}畏^こき

天^お祖^お神^もは^と大^つ元^み霊^{たま}に^まし^まし^まて^して^て 生^いき^とし^し生^いく^るに

分^わ御^け霊^ひを^{あた}与^え 祖^み宗^お父^や母^ちを^は通^として^お肉^し体^しを^わ頒^かち^{たま}給^う

御^み霊^{たま}は^あ有^あり^て在^ある^ま實^ま相^{こと}に^て 物^も質^のは^う流^つ転^り流^か動^わる^か仮^{かり}相^{のか}な^り

人^{ひと}は^あ万^ら物^{ゆる}の^{もの} 霊^{たま}長^{おさ}に^して 御^み霊^{たま}は^{ひと}一^つ 肉^し体^しは^{わか}分^る

これ天祖神のおおみかみ
の自他ひとつ
一如たねにして
御霊は主
肉体は従なり

この故に

心の目に諸々の清を見て
肉体の目に諸々の汚を見

心の耳に諸々の清を聞き
肉体の耳に諸々の汚を聞き

心の鼻に諸々の清を嗅い
肉体の鼻に諸々の汚を嗅い

心の口に諸々の清を言い
肉体の口に諸々の汚を言い

心の身に諸々の清を觸れ
肉体の身に諸々の汚を觸れ

心の意に諸々の清を想い
肉体の意に諸々の汚を想う

心の本清く本と影は双に清し

時の間に間に心は怒り
哀み損得に狂い

物質ものに迷まよいて己おのを中心みなかとし 御靈みたまはくもり易やすし

心こころに清きよ 汚きたなき 合せ結あわゆわえ 天祖神おおみかみを中心みなかに立たて

身みの分限きわみ明あからめ 主もと従しも 共ともに淨きよき御靈みたまは

神かみの子こ 神かみの生宮いきみやと顕現あらわし給たまい

永久とわの生命いのち光明ひかりを得えさしめ給たまえと 恐かしこみ恐かしこみも白もおす

幽界かくりよの魂たま 清きよ 大祓おほはらい

阿奈畏あなかしこき

幽界かくりよの人間ひとの靈魂みたま 虫むし 魚さかな 鳥とり 獸けもの 草木くさき 花實はなみ 岩石いわ 金鉄かね

諸々もろもろの精靈みたまは 三千年みちとせ以来このかた 現界うつしに生い存ます時とき

人の靈魂は 自我を中心に 物力を根本に

利慾色慾に迷いて 罪氣枯を積重ね

妬 誹 偽 盜 争 殺もて

一時の榮枯盛衰を競争い 一生を終焉し者多し

斯て幽界に逝ける靈 引落されし靈 両親のため

胎内にて葬られし靈 戦場の 或は 常時の掟により

罪なくして刑を受けし靈 生命を己にて絶ち

絶たされたる靈達は 迷靈 恨靈 となり

一方 虫 魚 鳥 獸 草木 花實 岩石 金鉄 の精靈は

自然の法則 運命の間に間に 自己の肉体を犠牲になし

万物の靈長たる人類に服従奉仕す は 深く感謝する処

なるも 人に憑き 或は使喚れし精靈等は 呪の靈となり

天祖神を中心おおみかみに 精神を根本みなかに 身の分限み明らかきわみかに結あかえ
道みち理ことわりを立たつる 大道かみのみちを實ふみおこな行ない 天極あめのふにある 神界かみのくにへ
又または元もとの精靈みたまの故郷ふるさとへ歸還かえるを許ゆるされ給たまいて 永久とわの
生命いのち光明ひかりを得えさしめ給たまえと 恐かしこみ恐かしこみも白もおす

ことたま たたえ のりと
言靈 贊 祝詞

掛卷かけまくも綾あやに畏かしこき

天祖神おおみかみは隱身かくりみにして 言靈ことたまに通かよい 出現あらわれ給たまう
言靈ことたまは有ありて在ある 永久とわの生命いのち光明ひかりなり

「ン」の父音ちちに結ゆわえ 「アイウエオ」の母音ははに開ひらき
「フ」を中みなか心かとして子音こに生うまれ 五十音いっつとうねを構つく成くる

相共に暗闇に彷徨 呻吟きて荒狂奔うなり

これ専一に自我のなせし行為の報酬 自己の縁による

発現なりと 人精霊は深く省み恥ち悔い畏れ覺りて

天祖神の御神徳に依り 速かに罪氣枯を焼祓い

洗清め給え

宇宙は「限定」の御代を迎え 三六の社会を成就すため

神幽現三界の万霊を過現未を通し 一柱に貫結え給う

大御心により今 万霊達は天祖神の御救済

御恩沢を得るの千載一遇に遭遇るなり

この故に

幽界にます人間の靈魂 諸々の精霊は靈眼を開き

おのも あわせ 融合 離散 はな れて 言葉 ことのは の綾 あや となり 霊質 たま 物質 もの を通 とお し
百千万億兆 も ちろ らね の書籍 かきもの 教典 おしえ に成 な り 智慧 ちえ を与 あた う
言霊 ことたま は天地 あめつち に充満 み ち 四海 よも に反響 かよ い 悠久 むかし より永遠 とわ に
生き通 いと す 人類 ひと は言霊 ことたま によりて 霊長 たまおさ の任務 つとめ を果 はた し
言霊 ことたま のマスミに澄 す み切 き る時 とき 元一 もとひと つの天祖神 おおみかみ に
貫 つらぬ きて皆通 みなかよ う 「言霊 ことたま は神 かみ なり 神 かみ は言霊 ことたま なり
言霊 ことたま は幸 さき はえ給 たま え」と賛言 たたえこと を 恐 かしこ み恐 かしこ みも白 もお す

かみのみちののりと
大道 祝詞

かけま 掛卷 あや くも綾 かしこ に畏 かしこ き

おおみかみ 天祖神 かみのみち の大道 おおみかみ は 天祖神 みなか を中心 こころ に 精神 もと を根本 もと に

身の分限 明らかに結え 道理を立て 實行うなり

人間は神の御慧沢により 生れ活かされ

万物は 一時 委されたる 借物と 覺りて 廣く厚き

御恩頼を感謝し 大御前美しく 仕奉るなり

夫は 貞 清らかに 妻を愛しみ 妻は 操 堅くして

愛しみを 受け 家庭 明るく 整え 身は 健康にして

活動を 樂しみ 天壽を 保ちて ミコトに 仕奉り

世界人類は 一家同族 森羅万象は 同根同胞と 結え 睦み

豊榮に 称榮 ゆくは これ 天祖神の 大道にして 人類の

實行う 道德の 根本なり 常に 省み 恥ち 悔い 畏れ 覺り

焼祓い 洗清めて 天祖神の 御教訓 ましし 大道を 世界人類の

道德として 實踐い 勤め 仕奉ると 恐み 恐み も 白す

感謝祝詞

掛巻くも綾に畏き

天地根本太御祖大神は 生きとし生くるに分御霊を
与え給う大元霊なり 天地を開き給う間に間に

地球を修理固成て 春夏秋冬の寒さ暑さ 昼夜晴雨を
執行い 火水土空気光熱等 あらゆる物質を与え給う
天祖神は宇宙を貫く 真相にして

天律 神則 道理 産霊 眞理 なり
博愛 智慧 言霊 生命 光明 なり 大精神は

雄々しさ 逞しさ おほらかさ 明朗さ 荒々しさなり

天祖神は人間に分御霊とミコトを与えられ

神の生宮として神界より現界に遣され 祖宗父母を

通して肉体を受けしめ 衣物 食物 住居と万物を

貸し与え 養育い保護り美装し給う

己の心は豊かに楽しく 身は健かに康く 生業に務め

家庭円く治まり 世界人類 森羅万象と共に存し

共に榮え 日に新に 日々に新に進み歩む 今日も亦

深厚き慈悲仁愛の御親心と 高く尊貴き御恩頼を

感謝し 大御前厳しく仕奉ると 恐み恐みも白す

ひとつののりと
一体祝詞

掛巻くも綾に畏き

天地根本太御祖大神は 宇宙を宮居となし給い

空間 時間 靈質 物質を通して 神幽現の三界を

統治し給う 人間は天祖神から分御靈とミコトを

賜り 祖宗父母を通して 肉体を受け 神の生宮 祖宗の

自己顕現として誕生る

宇宙と己は空間を通して 一体なり

宇宙に広大空間ありて 己に狭小空間あり

己に狭小空間ありて 宇宙に広大空間あり

宇宙あめつちの空間そらは縮少ちいさくして 己おのの空間そらを中心みなかに集りあつま

己おのの空間そらは拡大おおきくして 宇宙あめつちの空間そらに満みつる

宇宙あめつちは一球ひとつのたまにして 己おのは広ひろ大おほき天地そらなるをし知る

宇宙あめつちと己おのは時間ときをとお通してひとつ一体なり

宇宙あめつちに永遠とわの生命いのちありて 己おのに一時ひとときの壽命よわいあり

己おのに一時ひとときの壽命よわいありて 宇宙あめつちに永遠とわの生命いのちあり

宇宙あめつちの生命いのちはおさ圧おさえて 己おのの一生いのちをみなか中心あつまに集り

己おのの一生いのちは脹ふくらみて 宇宙あめつちの生命いのちに満みつる

過去むかし 現在いま 未来のちは 時間ときをとお通しひとつらわ 一聯ひとつらわにして己おのは永遠とこしえの

生命いのちなるをし知る 天祖神おおみかみと己おのは靈質たまをとお通してひとつ一体なり

天祖神おおみかみに大元靈おおもとつみたまありて 己おのに分御靈わけひあり

己おのに分御靈わけひありて 天祖神おおみかみに大元靈おおもとつみたまあり

世界人類よのひと生きとし生くるは 分御靈わけひを通し 一ひとつ根ねにして

己おのは有ありて在ある御靈みたまなるをし知る

天祖神おおみかみは

己おのの目めを通とおして 宇宙あめつちの相さまを見み

己おのの耳みみを通とおして 宇宙あめつちの音おとを聞きき給たまう

己おのの鼻はなを通とおして 宇宙あめつちの香においを嗅かい

己おのの口くちを通とおして 宇宙あめつちの言ことを宣たまり給たまう

己おのの手てを通とおして 宇宙あめつちの面おもを固かため

己おのの足あしを通とおして 宇宙あめつちの道みちを歩あゆみ給たまう

己おのの身みを通とおして 宇宙あめつちの象かたちを現あらわし

己の心を通して 宇宙の心に服従はしめ給う

更に頭髮と脚は大空大地に通い 吸う息 呼く息にて

神の生命を新しく受入れ 左右の眼玉は 天極と

星日月に結え 七色の美光を放つ

宇宙と己は物質を通して一体なり

天祖神に宮居の宇宙ありて 己に生宮の肉体あり

己に生宮の肉体ありて 天祖神に宮居の宇宙あり

宇宙は縮少くして 己の肉体を中心に集り

己の肉体は拡大くして 宇宙に満つる

星の瞬くは己の瞬く 日の光るは己の光るなり

地球の廻るは己の廻る 月の照すは己の照すなり

花の咲くは己の咲く 鳥の啼くは己の啼くなり

雪ゆきの降ふるは己おのの降ふる 人ひとの樂たのしみは己おのの樂たのしみなり

山川やまかわくさき草木ありとあらゆるもの森羅万象もは 原子もを通とおし 一元ひとつのものとにして 己おのは

天地あめつちと共ともにある實相まことのさまなるをし知る この理ことわりにて 空間そら

時間とき 靈質たま 物質もの を通とおし 天祖神おおみかみと己おの 宇宙あめつちと肉しし体しは

一ひとつ体つにして 神かみ幽現かくり うつしの 三界みくさのくにに通かよう この故ゆえに己おのは

天祖神おおみかみに守まもり護まもられ 宇宙あめつちに生いかす活いかさるる尊とうとき

神かみの子こ 神かみの生宮いきみやなりと覺さとし給たまい 「限定きま」の時代ときを迎むかえ

新あたしき四海よもの波なみ浪なみ安やす定すけき大御世おおみよを 現界うつしのくにに開あ頭らわします

大御神業おおみ わざに結ゆわえ給たまい 真ま一こと道ひとみちに仕つかえしめ給たまえと

恐かしこみ恐かしこみも白もす

たまあらかえ
魂新替 祝詞のりと

掛巻くも綾に畏き

天地根本太御祖大神は 宇宙の「創造」「統一」

「自在」「限定」の時代を一聯の環の様に仕組み給う

「創造」の時代 眞空遙かに 天極を御中心として

億兆の星雲を運行し給い その内に一つの宇宙を

造り 太陽を中心として 地球 月等を廻転させ給う

悠久しき太古 天地を開き給う間に間に 地球を

修理固成て 山川陸海を象り 季節天候を執行い

岩石 金鉄 木草 花實 虫 魚 鳥 獣を殖し

原始の人間を創造り給う

「統一」の時代となり 人間は神そのままの精神にて

大道を實行い 久しく神代として精神文化は

進みたるも 物質文明は幼稚なり ここを以て

「自在」の時代を許し給い 人類は自我を中心に

物力を根本に利慾に走り 妬 誹 偽 盜 争 殺

もて 一時の榮枯盛衰を競うに至る

天祖神は各の使徒を遣し給い 神儒佛回基の宗教の

開祖として 異なる經典を通し 大道 道德を教化え

精神の鍛錬 靈魂の救済を伝えさせ給いたるも

本末を誤り 偶像 建物に狂い

祭礼 利益に迷う者等現れたり 近き世に至り

物質文明は大いに開發け 生活は進歩たるも

道義は廃れて社会は混迷を加う

「限定」の時代を迎え 天祖神は天祖神の大道を

古に復元し 嚴御代の足御代を 現界に再現さんと

経綸み給いて 人類の魂新替給う天機至りたり

霊眼を開きて三千年以来の行為を省み恥ち悔い

畏れ覚り 罪氣枯を焼祓い洗清めて 聖旨に服従う

人間は 幸福繁榮を得て 永久の生命光明を賜わる

今日も亦 心豊かに楽しく 身健かに康く 生活は

満ち足り 世界も家庭も円く 大元霊に結え給いて

豊榮に称榮ゆる新しき大御世を 迅速く開顕き給い

奉迎め給えと 大御前に畏敬い乞禱みて仕奉ると

恐み恐みも白す

りゅうおうおおおかみのりと
竜王大神 祝詞

かけま 掛巻くも綾にあやかしこに畏き

りゅうおうおおおかみは 宇宙の府に座し座す天祖神の

おつか 御使いにして 大建替の「限定」の御代を迎え

ひふみ 動静解凝引弛合分の八大神徳を御発動き給いて

ひと 人類の「自在」の御代に犯せし諸々の罪気枯を

やきはら 焼祓い洗清め 世界のひとを大道に復古し 三千年以来の

よ 社会の混迷を覚醒さんと この聖地に降臨れ給う

魂たま新あら替かえの神と機ぎに至いたり
七な種なの御み神た宝からを開ひらき給たまう
竜り王ゆう大おお神おを尊たみ敬ういて 天お祖お神みのかもみと 嚴い御か代しのみよ
足た御ら代しにみなよし賜たまえと 乞こ祈いの奉みり 真ま一こと道ひとに
御み仕つかえ申もうす由よしを 見み看そし聞き食こせと 恐かしみ恐こみも白もす

御祖宗祝詞

天地の眞理を覺りて 各本の宮居に歸り給い
永久の生命光明を得て 弥榮えしめ給えと祈り

子孫は勲功を賛え 高き恩愛を感謝し 家庭まるく
治め生業に努力まつる状 所看し所聞めし 常盤に
堅盤に守り 幸はえ給えと 恐み恐みも白す